

第4章

札幌市の歴史文化

第4章 札幌市の歴史文化

1 札幌市の歴史文化の特徴

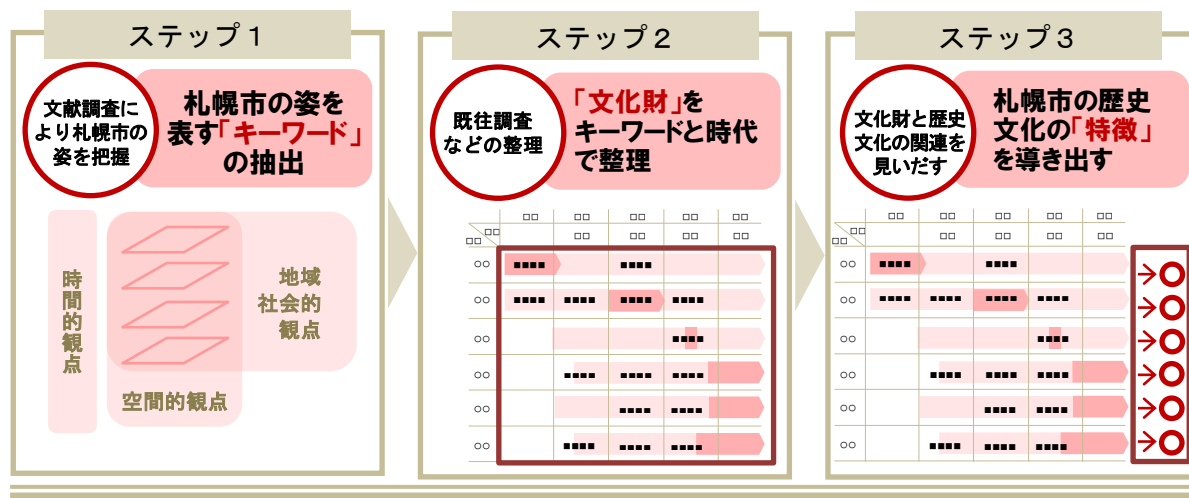
(1) 歴史文化の特徴の整理の考え方

この計画における歴史文化とは、文化財とその周辺環境（文化財が置かれている自然環境や周囲の景観、文化財を支える人々の活動に加え、文化財を維持・継承するための技術、文化財に関する歴史資料や伝承等）とが一体となったものを意味します。札幌の多様な文化財の価値や魅力を理解し、保存・活用を考える上では、文化財を生んだ札幌の歴史文化の特徴を踏まえることが大変重要です。

この計画の策定にあたっては、札幌市の歴史文化の特徴について、空間的観点（自然環境や地形など）・地域社会的観点（社会を大きく変えた出来事など）・歴史的観点（歴史文化の時代を超えた継承）から、下図のようなステップで整理することとしました。

関連文献や既往調査結果と文化財の現状等を踏まえて導き出した6つの歴史文化の特徴は、今後の札幌市の文化財の保存・活用を考える上で重要な視点として、(2)「札幌市の歴史文化の特徴」において示しています。

■札幌市の歴史文化の特徴の整理



【札幌市の歴史文化の特徴】

- ① 原始の昔から育まれた人々の暮らし
- ② 幕末に始まる諸村の開拓と開拓使による中心市街地の建設
- ③ オリンピックで変わった街の姿と市民の意識
- ④ 都心で楽しむ季節の催し・風物詩
- ⑤ 積雪寒冷地に成立した大都市
- ⑥ 継承されるアイヌ文化

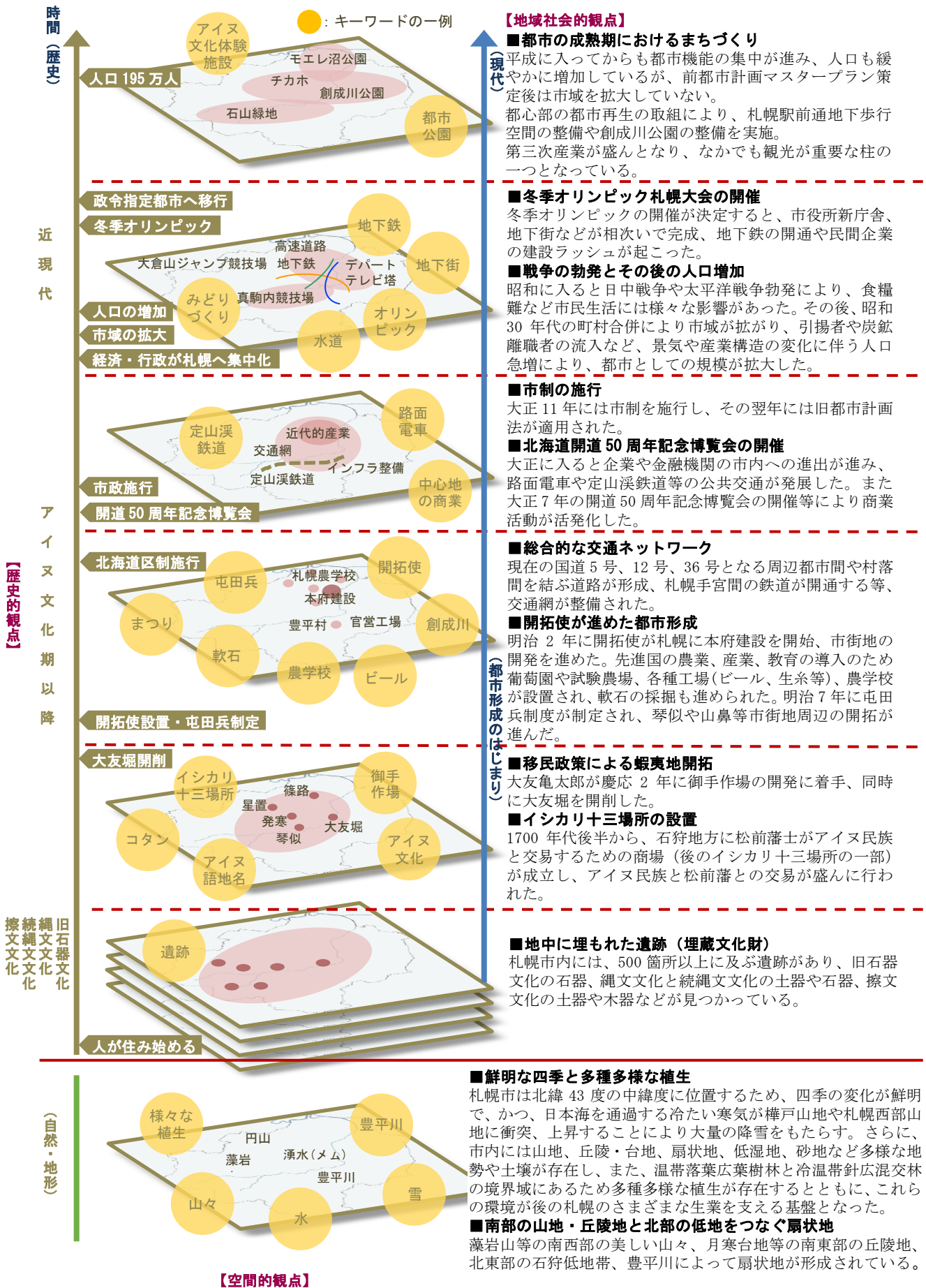
一方、この計画の策定に際し、市民参加による文化財の調査・把握の取組として開催した市民ワークショップ（『れきぶんワークショップ』）や、札幌市歴史文化基本構想策定委員会においては、地域の自然や歴史上の出来事などを反映した札幌市の歴史文化の特徴について、上記のステップと異なる視点からも様々な意見が交わされました。

市民が「守り伝えて行きたい」、「誰かに伝えたい」と考える札幌市の歴史文化の特徴について、今後も市民等の中で多様な意見が交わされることが、文化財の保存・活用を進める上で重要であることから、これらについて、(3)「市民ワークショップ等で話し合われた歴史文化の特徴」として紹介しています。

【市民ワークショップ等で話し合われた歴史文化の特徴】

- 各地に開かれた屯田兵村
- 今も親しまれる地産建材
- 「馬鉄」に始まった路面電車
- ななめ通りから見る札幌村の歴史
- 手稲山麓に残る鉱山村の記憶
- 水の恵みに支えられた西区の稲作文化
- 日本酪農の父が残した足跡
- 歩兵第25連隊のまち月寒

■札幌市の姿を表す「キーワード」の抽出【ステップ1】



■キーワードで文化財を整理し、歴史文化の特徴を整理【ステップ2～3】

歴史的 観点	時代区分	旧石器文化 縄文文化 統縄文文化 擦文文化	アイヌ文化期以降					
					近現代			
地域 社会的 観点	時代背景		イシカリ十三場所 設置 大友堀開削(慶応 2) など	開拓使設置(明治 2) 屯田兵制制定 (明治7) 総合的な交通ネッ トワークの確立 50周年記念博覧 会開催 市制施行(大正11) など	冬季オリンピック の開催(昭和47) 本格的な都市計画 事業実施 など	市の成熟期におけ るまちづくり など		
	キーワード							
	考古学的遺産	旧石器、縄文、統縄文、 擦文文化の遺跡、出土 品 など	アイヌ文化期の遺跡、 出土品 など					① 原始の昔から 育まれた人々の 暮らし
	札幌市の都市 形成 (イシカリ十 三場所、御手 作場、開拓使、 農学校)		荒井金助／早山清太 郎／大友亀太郎／御 手作場／創成川(大友 堀)／吉田茂八／志村 鉄一／道道花畔札幌 線(ななめ通り) など	島義勇／清華亭／開 拓使文書／開拓使札 幌本庁舎跡及び旧北 海道庁本庁舎／豊平 館／旧札幌農学校演 武場(時計台)／ウイ リアム・スミス・クラ ーク／エドウィンダ ン記念館／旧開拓使 工業局庁舎／すすき の／ビール工場／碁 盤の目の街並み／北 大植物園・博物館／ 北海道大学古河記念 講堂／北星学園創立 百周年記念館／北海 道大学附属植物園庁 舎／北海道大学／遠 友夜学校 など				② 幕末に始まる 諸村の開拓による 中心市街地の 建設
	札幌冬季オリ ンピック (競技場、地下 鉄、地下街)				札幌市営地下鉄／オ ーロラタウン・ポー ルタウン／大倉山ジ ャンプ競技場／真駒 内セキスイハイムア イスアリーナ／真駒 内公園／サッポロテ イネなど			③ オリンピック で変わった街 の姿と市民の 意識
	風物詩 (まつり、各恒 例行事、公園)			北海道神宮／北海道 神宮頓宮／札幌まつ り／円山公園／大通 公園／中島公園／円 山の花見 など	さっぽろ雪まつり／ さっぽろ大通ビアガ ーデン／豊平川花火 大会／ホワイトイル ミネーション など	YOSAKOI ソーラン祭 り／サッポロシテ イジャズ／パシフ ックミュージック フェスティバル ／さっぽろオータ ムフェスト など		④ 都心で楽しむ 季節の催し・ 風物詩
	積雪寒冷地 (雪、除雪、建 築様式)				除雪技術／北方圏型 規格住宅 など	雪氷熱／モエレ沼 公園 など		⑤ 積雪寒冷地に 成立した 大都市
アイヌ文化 (アイヌ語地 名、コタン、 歌、踊り、アイ ヌ文化施設)		アイヌ古式舞踊／天 神山チャシ／アイヌ 語地名／コタン など	アイヌのまるきぶね ／知里真志保／遠星 北斗／ジョン・パチ エラー／パチエラー 八重子／ウタリグス など	アシリチェッノ／ミ ノ 札幌アイヌ協会(北 海道アイヌ協会) など	ウレシパモシリ北 海道イランカラッテ 像／北海道アイヌ 総合センター／サ ッポロピリカコタン ／北海道博物館 など		⑥ 継承される アイヌ文化	
豊かな自然や地形が文化財に影響								
空間的 観点	自然・地形	サッポロカイギウ／藻岩山／円山／天神山／手稲山／円山原始林／藻岩原始林／豊平川／厚別川／琴似発寒川／伏古川／月寒川／扇状地／湧水(メム)／イタヤカエデ／オオモミジ／サクシュコトニ川／鮮明な四季／雪 など						

：時代の流れ

表中に記載した文化財等は、札幌の歴史文化の特徴を整理するにあたり、構想策定委員会や市民からのアンケート調査、れきぶんワークショップ等で名前があがった文化財等の一部です。表を構成する上で複数の欄に重複して記載したものもあります。

(2) 札幌市の歴史文化の特徴

①原始の昔から育まれた人々の暮らし

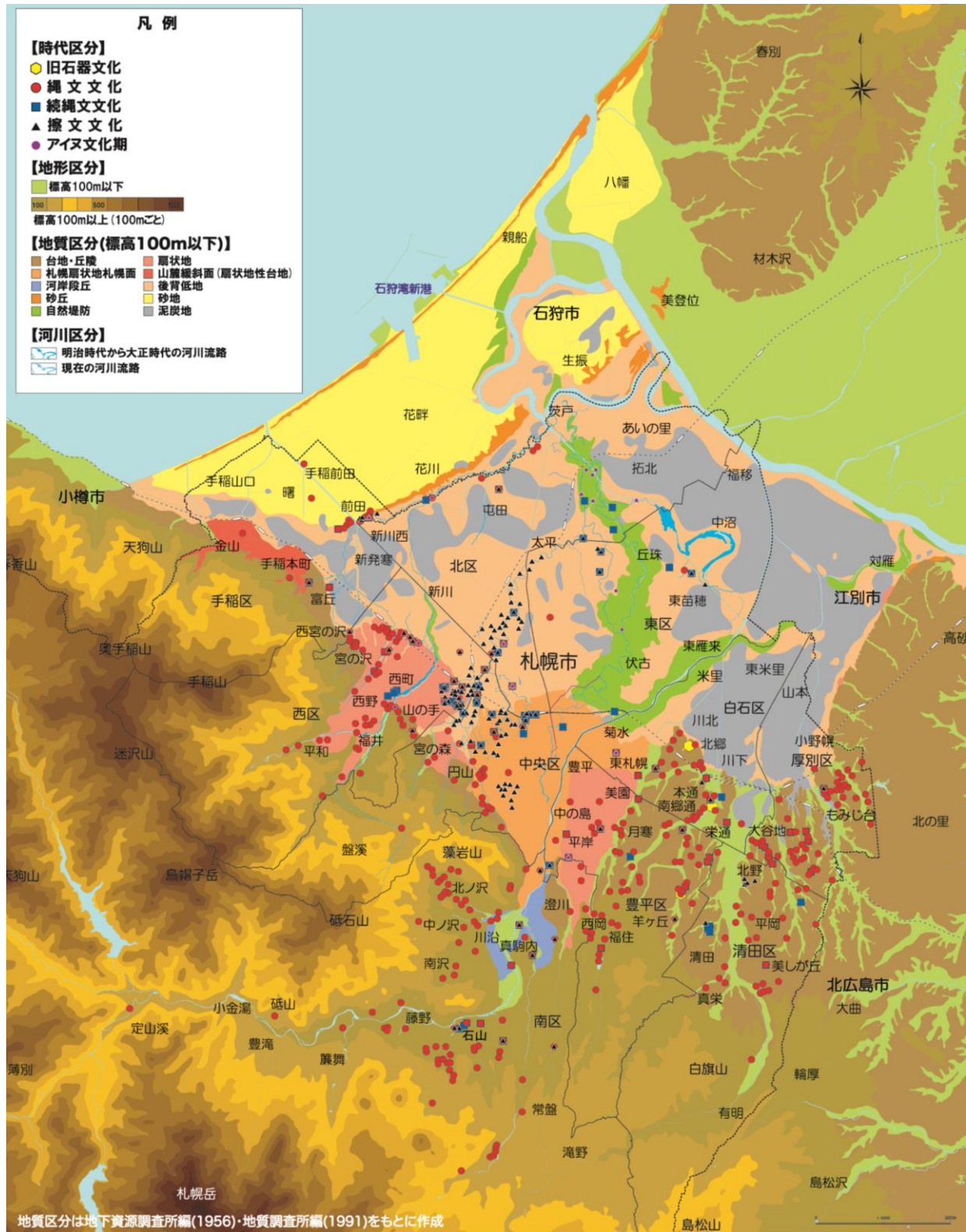
札幌は、石狩低地帯の西側で、西部北海道の東北の縁に位置しています。地形・地質から見ると、市域の北西部から南西部にかけては山地地域があり、東部には丘陵地や台地地域、さらに豊平川や発寒川につくられた扇状地、そして北部の沖積平野から成り立っています。また、石狩湾沿いでは、複数の砂堤列が並び、最も古い海岸砂丘である紅葉山砂丘が、札幌北西部から石狩市にかけて発達しています。

札幌で最初に人類がその足跡を残したのは旧石器文化の人々で、今から1万数千年前の最終氷期まで遡ります。約4万年前頃、支笏カルデラ形成に伴う火山の大噴火によって石狩低地帯南半をほぼ埋め尽くした支笏火砕流堆積物は札幌市域にも到達し、西岡台地、月寒台地、清田台地、厚別台地が形成されます。札幌で見つかっている旧石器は、この西岡台地、月寒台地、清田台地を流れるラウネナイ川～月寒川上・中流域に分布しています。

その後、徐々に温暖化が進み、今から約8000年前頃の縄文早期になると、温暖で安定的な気候となり、いわゆる縄文海進が始まって、札幌北部に海水が侵入します。今から約6000年前、縄文前期も終わり頃に近づくと、河川的作用によって北西部には砂州が発達し、内湾となっていた低地は土砂で埋め立てられていきます。この頃から、南東部の丘陵・台地、豊平川や発寒川がつくった扇状地、そして北西部の海岸砂丘まで、低湿地を取り囲むように、あらゆる場所に人々が暮らすようになります。札幌の縄文遺跡の数は中期のものが最も多く、その理由の一つとして、この時期に温暖で暮らしやすい自然環境が広がっていたことが関係していると言ってもいいかもしれません。

今から約4000年前を境に、再び気候が寒冷化していきます。3000年前頃には、現在よりも年平均気温で1～2℃ほど低くなり、海水面も2m程度下がっていたと考えられています。この頃は、ちょうど縄文後期以降に相当し、遺跡の数も徐々に減少していきます。海水面が下がることによって海岸線が後退すると、内湾も消失し低湿地は乾燥し始めます。東区丘珠町で見つかった丘珠縄文遺跡（縄文晩期～続縄文）は、低湿地を利活用した先駆けの遺跡だといえます。

これ以降、続縄文文化、擦文文化の人々は、低地部にも積極的に生活圏を拡大していきます。この頃になると、人々は主に扇状地から沖積平野にかけて、当時の河川に沿うように集落を形成していきます。擦文文化の遺跡の調査では、主にシカやサケなどの動物性資源のほか、アワ、ヒエ、キビなどの栽培植物種子も見つかっており、人々は、狩猟、漁労、採集だけではなく、本州との交易を通じて雑穀栽培といった新たな生業も取り入れながら、低地部の資源利用や河川流域のネットワークを重視する暮らしを定着させていったようです。



札幌市の遺跡分布図
出典:札幌市埋蔵文化財センター

②幕末に始まる諸村の開拓と開拓使による中心市街地の建設

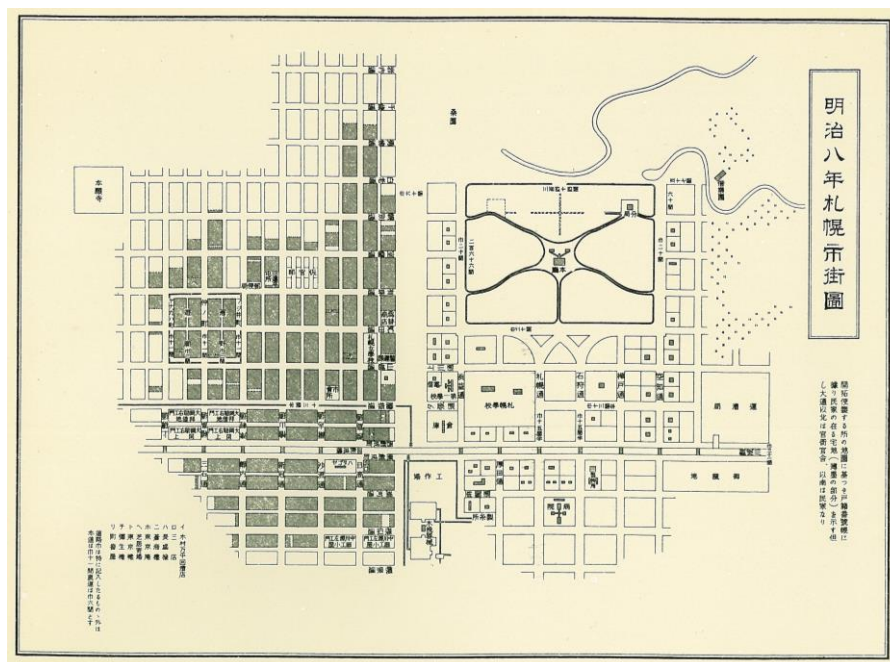
江戸幕府が札幌を北海道開拓の拠点として選定した背景には、大河石狩川の舟運により内陸部や日本海、太平洋へも通じる地の利に加え、外国の脅威、特にロシアの南進に備える意図があったとされています。この選定に影響を与えたのは、北海道の名付け親として有名な松浦武四郎による推薦で、武四郎は、文化年間(1804年～1817年)に近藤重蔵が残した記録を基に現地の二人のアイヌ民族の首長の協力を得て周辺を調査し、豊平川を遡る3里(約12km)の地(札幌)がその適地であると考えていました。

以後、大友亀太郎による札幌元村の開村をはじめ、各地に入った移住者たちにより、後に市域を構成することとなる各地における農地等の開拓が盛んになっていきます。

その後、明治2年(1869年)の開拓使設置により、明治政府による北海道開拓の拠点として、現在の札幌市都心の基礎となる本府の建設が始まりました。開拓判官の島義勇は、地形や地盤が比較的安定し、豊富な地下水を利用可能な豊平川扇状地上に、碁盤の目状に整然と区画された街区と機能別の区域分けが特徴の市街地整備計画を策定します。

黒田清隆が開拓次官に就任した明治3年(1871年)からは、大規模開拓に成功していたアメリカに倣うため、開拓使顧問として招いたホーレス・ケプロンの構想「開拓使十年計画」により、札幌農学校初代教頭として知られるウィリアム・クラーク、時計台や豊平橋の設計者としても知られるウィリアム・ホイラー、北海道の畜産業の発展に貢献したエドウィン・ダンら、多くの御雇い外国人の力を借りながら、都市建設や近代産業導入、将来を担う人材育成などが進められました。

幕末から明治へ、外国の脅威も背景に、国家主導で行われたこれらの開拓事業は、後の道都・札幌の基礎の形成につながるものでした。



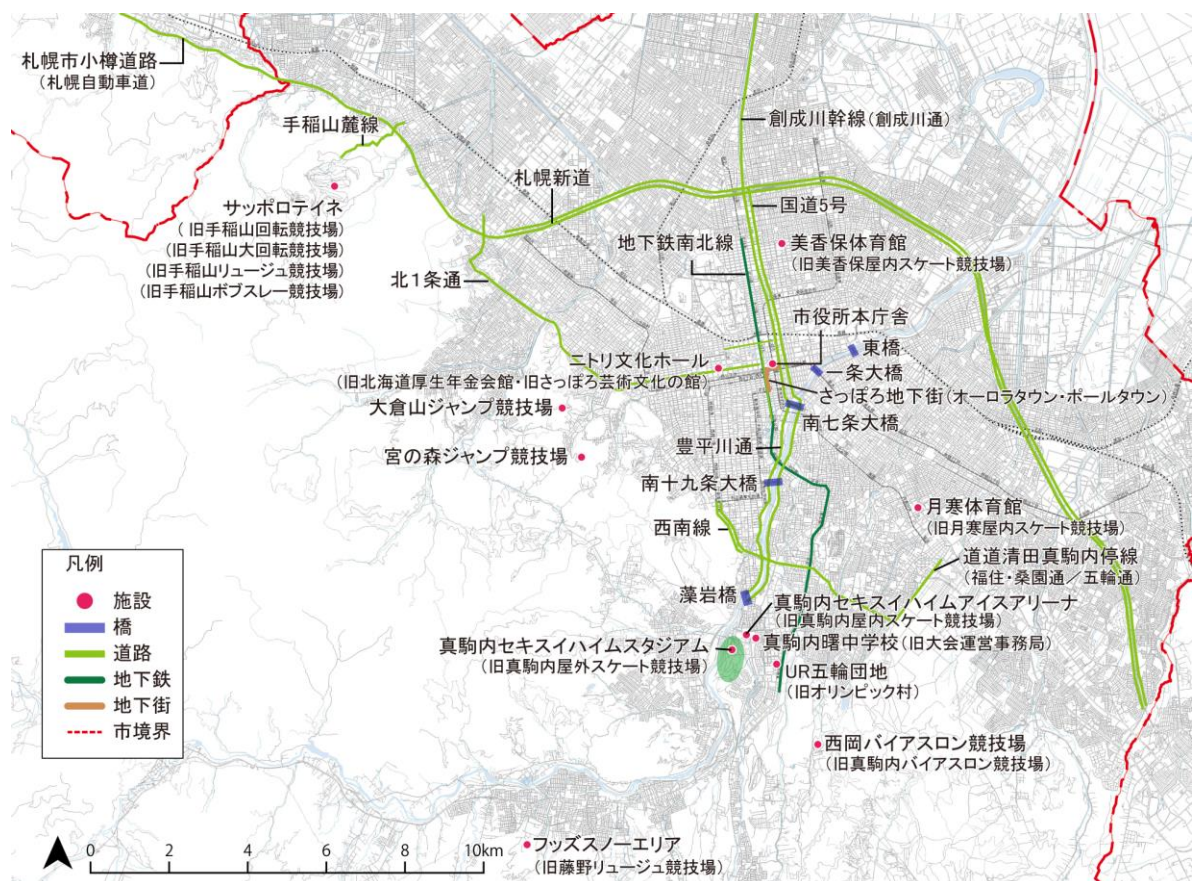
明治8年の札幌市街地
出典: さっぽろ文庫別冊地図(明治編)

③オリンピックで変わった街の姿と市民の意識

昭和47年（1972年）の冬季オリンピック札幌大会は、アジアで初めて開催された冬季オリンピック大会であり、この大会の成功は、札幌の街の構造上の変化に加えて国際化を促すとともに、市民の誇りやアイデンティティの形成にも貢献したと考えられます。

大会にあわせて多くの競技施設が設けられるとともに、都市機能の整備・向上が進められ、民間資本による建設ラッシュも相まって、街並みや市民生活に様々な変化がもたされました。象徴的なものとして、いずれも大会前年の昭和46年（1971年）に、今も市民生活に欠かせない、市営地下鉄南北線（当時は北24条駅～真駒内駅間）と、さっぽろ地下街（オーロラタウン・ポールタウン）が開業しました。オリンピック競技を間近に観戦し、その熱気を感じたことで、市民の中にウィンタースポーツに親しむ文化が定着したことも、その後多くのウィンタースポーツの世界大会が開催されることになる札幌にとっての変化と言えるかもしれません。

札幌オリンピックで使用された施設の中には、市内の展望スポットとして人気が高い大倉山や宮の森のジャンプ競技場など、現在様々な形で市民や観光客に親しまれているものも多く、スキージャンプのスタート地点から助走路越しに市街地を望む大倉山展望台は、近年、夜景観光でも注目されています。アルペンスキー競技の会場となった手稲山のスキー場には現在も聖火台が残り、かつて行われた競技種目をその名に冠したいくつかのコースが、訪れる人々にその歴史を伝えています。



冬季オリンピック札幌大会をきっかけに造られた道路や交通機関、施設位置図

④都心で楽しむ季節の催し・風物詩

札幌は、四季が鮮明と言われる日本にあって、おそらく最もその傾向が顕著な大都市です。これは、中緯度地域の中でも、夏と冬の日照量較差が大きい北緯 45 度付近（42～43 度）に位置するためですが、大都市でありながら豊かな自然にも恵まれており、加えて多雪であることも、季節の変化をはっきりと印象付ける要素といえます。

札幌には、市街地で楽しめる風物詩のような祭事やイベントも多く、例年 6 月 14 日から 16 日にかけて行われる「札幌まつり（北海道神宮例祭）」は、明治 5 年（1872 年）に始まる北海道神宮（旧札幌神社）の例祭を起源に 1 世紀以上の歴史があり、鮮やかな衣装をまとった千人以上の市民が神輿や山車とともに市中を練り歩く「神輿渡御」は、本格的な夏の到来を待ちわびた多くの市民の目を楽しませます。

大通公園は、芝生、木々や花壇がオフィス街に潤いを与えるだけではなく、広大なオープンスペースを生かした催事場として、市民や観光客に親しまれてきました。終戦間もない昭和 25 年（1950 年）には、冬の札幌を代表するイベントといえる「さっぽろ雪まつり」が、中高生による 6 基の雪像製作でスタートし、昭和 34 年（1959 年）には、初夏の訪れを告げる「ライラックまつり」が、同年夏には、「大通ビアガーデン」が催されるようになりました。昭和 56 年（1981 年）には、市街地の初冬を飾るホワイトイルミネーションの会場となり、近年では北海道の食を楽しむ秋のイベントとして、「さっぽろオータムフェスト」が人気を集めています。

円山公園が花見の名所として知られるようになったのは、明治 10 年代末頃といわれています。大正 12 年（1923 年）には市電の路線が円山公園まで延伸され、花見シーズンには 1 週間限定で花見特別輸送便が運航しました。北海道の花見の特徴として、ジンギスカンを食べながら花を楽しむ習慣があり、満開の桜の下で炭火を囲む光景も、札幌の特徴的な風物詩のひとつといえるでしょう。



さっぽろ雪まつり(第 1 回)
雪像「熊」
出典:札幌市観光協会



雪まつり 2011 年



大通公園ビアガーデン 1981 年
札幌市公文書館所蔵



大通公園ビアガーデン 2014 年



札幌神社の花見 1900 年
北海道大学附属図書館所蔵



円山公園の花見 2006 年



札幌まつり 1960 年
札幌市公文書館所蔵



札幌まつり
札幌市公文書館所蔵

⑤積雪寒冷地に成立した大都市

札幌市は、約197万人の人口を抱える大都市であると同時に、年間6mの積雪に見舞われる多雪都市です。大都市での人々の暮らしが、これほど多くの雪と向き合う例は世界でもほとんどなく、このことは、札幌に暮らす人々が、雪や寒さの中で快適に暮らすため、様々な創意工夫を重ねてきた結果であるといえます。

また、札幌市は、「冬は資源であり、財産である」のスローガンのもと、世界の冬の都市が集まり、冬の技術や経験を学びあうためのネットワークである「北方都市市長会」（現「世界冬の都市市長会」）の設立を昭和56年（1981年）に提唱し、以来、その活動を通じて積雪や寒冷という気象条件を共有する世界の冬の都市のより良いまちづくりに貢献してきました。

明治の初め頃、雪が積もると、人々がかんじきを履き、雪を人力で踏みしめて道を付けていましたが、明治19年（1886年）にはロシア式の馬そりを改良した三角ぞりが、昭和21年（1946年）にはアメリカ軍から借用したブルドーザーが除雪機械として登場し、昭和47年（1972年）の札幌オリンピック開催を機に近代的な除排雪体制が整備されました。明治21年（1888年）には市民に雪踏み除雪の協力を要請した記録があり、行政と市民の協働により冬の快適な道づくりを進めてきたことが想像できます。大正7年（1918年）には、今も冬の風物詩として親しまれるササラ電車⁵⁶が登場しています。

積雪寒冷地に住むための工夫は、住宅地の景観にも現れます。冷気を遮断する二重窓⁵⁷は、一般には戦後に普及しましたが、明治21年（1888年）建築の北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）では既に採用されていました。興味深い例としては、明治13年（1890年）頃建築の旧永山武四郎邸の窓は一重の上げ下げ窓ですが、渡り廊下でつながる昭和10年代建築の旧三菱鉱業寮は、寒冷地仕様の二重窓です。



旧三菱鉱業寮の二重窓

また、屋根に積もった雪が凍り付く札幌では、本州のような瓦屋根は定着せず、傾斜のついたトタン屋根がかなり古くから採用されていましたが、昭和30年代以降には、積雪による住宅への荷重や「すが漏れ⁵⁸」、庇の雪やつらら落としの負担を軽減できる急勾配の三角屋根が普及しました。近年では、一見平坦な無落雪屋根⁵⁹を持つ箱型に近い形状の住宅が一般化し、郊外の住宅地などでは特徴的な街並みを形成していることもあります。



三角屋根の家
札幌市公文書館所蔵

粉塵⁶⁰被害が深刻化したことに対応した1990年代以降の自動車のスパイクタイヤ規制とその後のスタッドレスタイヤの普及は積雪時の景観も向上させました。このほか凍結した舗装路面での転倒防止のための「撒き砂」や、多くの市民が凍結路面で転ばないための歩き方を体得していることなども、積雪寒冷都市の生活文化における暮らしの特徴かもしれません。

⁵⁶ ササラ電車：車両の前後に取り付けた、竹のササラを利用した除雪装置で雪を掃き飛ばす除雪用の電車。

⁵⁷ 二重窓：遮音・断熱などのため、二重の構造にした窓。

⁵⁸ すかが漏れ：屋根に積もった雪が溶けて、水が室内に侵入すること。

⁵⁹ 無落雪屋根：積もった雪を載せた状態のまま自然処理をする構造を持った屋根。

⁶⁰ 粉塵：空気中に存在する固体の微粒子。

⑥継承されるアイヌ文化

札幌が都市として形成された過程における大きな特徴のひとつとして、先住民族であるアイヌ民族が生活していたところに、本州ほかの各地からたくさんの移民が移り住み、比較的短期間で急速に都市が形作られたということがありと考えられます。

近世以前まで、札幌の地を生活の舞台として長く暮らしてきたのは、主としてアイヌ民族でした。万延元年(1860年)頃に成立した西蝦夷地石狩場所絵図⁶¹などからは、サクシュコトニ川沿いに暮らす琴似又一ら、発寒川流域に暮らすコモンタラ、フシコサッポロ(伏古)川流域に暮らすルヒヤンケらなどのアイヌ民族の名が見え、都市や農地が形作られる遥か以前から、人が暮らすのに適した土地はアイヌ民族が利用していたことが分かります。

その後の都市や農地の開発、国の土地制度や同化政策などで、アイヌ民族の生活は大きく変えられ、非常に多数の和人の中で差別などの苦難を経験しながらも、札幌のアイヌ民族はその尊厳と、独自の文化を今日まで伝えてきました。アイヌ古式舞踊の保護団体や、新しい鮭を迎える伝統儀式アシリチュプノミなどの儀礼を受け継ぐ人々の活動に加え、平成15年(2003年)にはアイヌ民族の伝統文化活動等の推進及び保存・継承・振興等及び市民とアイヌ民族との交流により市民理解を促進する、アイヌ文化交流センター「サッポロピリカコタン」がオープンしています。また、平成31年(2019年)3月に地下鉄南北線さっぽろ駅構内に誕生した「アイヌ文化を発信する空間(ミナパ)」では、伝統的なアイヌ民族の生活や文化を発信するとともに、アイヌ民族の意匠を用いたアート作品などが展示され、札幌は、アイヌ文化を知ることを通じ、札幌を含めた北海道の歴史文化の多様性を理解できるとともに、今後も継承されるアイヌ文化の現在を感じられる場でもあります。

また、札幌には、アイヌ語に由来する地名が多くあることも知られています。アイヌ語の地名には、自然地形や地質的特徴を言い表したものが多く、当時の地形や地質を学ぶ手掛かりとなります。また、アイヌ民族が地形を含めた生活環境の中でその土地をどう名付けたかを知ることは、アイヌ民族の暮らしや文化について考えるきっかけにもなります。

⁶¹ 西蝦夷地石狩場所絵図：石狩河口附近および石狩川本流の図。豊平、夕張、千歳川のほか上流は忠別川、沿岸のアイヌの集落、番屋なども描かれている。

アイヌ語に由来すると考えられる地名の意味（一例）山田秀三著「北海道の地名」より抜粋

【手稲】

幕末の旧図には、現在の手稲のあたりに「テイネニタツ」と書かれている。「テイネ・ニタツ (teine-nitat) = 濡れている・低湿荒野」の意味だと言われている。また、「テイネ・イ= 濡るる・処」の意だとも言われている。手稲の地名はこれらの呼び名に由来すると考えられる。

【藻岩】

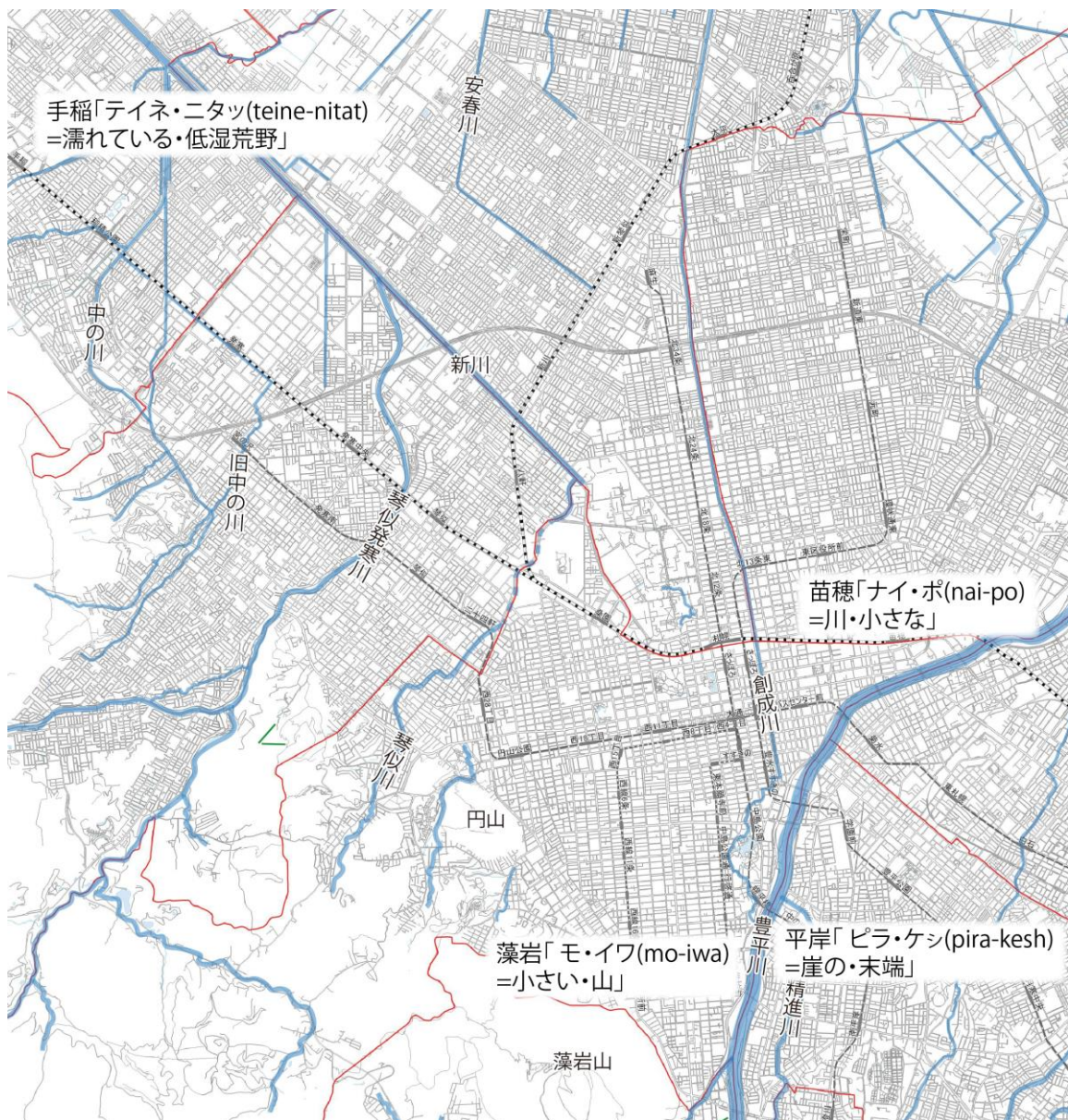
「モ・イワ (mo-iwa) = 小さい・山」の意味だと言われており、昔は円山をモイワと呼んでいたが、後に間違って現在の藻岩山にこの名前が付けられてしまったと言われている。

【苗穂】

JR 苗穂駅の北側にあった伏古川の支流ナイポがこの地名の由来だと考えられる。「ナイ・ポ (nai-po) = 川・小さな」という意味だと言われており、po は子どもの意であり、地名の中では指小辞⁶²として使われる。

【平岸】

「ピラ・ケシ (pira-kesh) = 崖の・末端」の意味だと言われている。豊平川の東側に中の島があり、その東側がずっと崖続きになり、崖下を精進川の下流が流れている。平岸もその辺りについた名が広がって地名になったと考えられる。



アイヌ語に由来すると考えられる地名の一部

⁶² 指小辞 (ししょうじ) : 主に名詞や形容詞に付加し、その語の示すものよりも更に小さい観念あるいは親愛の情を示す接尾語。

(3) 市民ワークショップ等で話し合われた歴史文化の特徴

■各地に開かれた屯田兵村

屯田兵制度は、開拓使の次官であった黒田清隆が永山武四郎などの意見を元に建議し、明治維新後に生業を失った士族を北海道の開墾と非常時の防衛に当たらせることを目的に、明治7年(1874年)に始まりました。志願者は、住まいとなる兵屋と土地、移動費、家具や農具、制服、最初の3年間は扶助米などが与えられ、家族を連れて東北など様々な地域から移住してきました。札幌



手稲で雪中訓練を行う屯田兵(明治24年3月)
北海道大学附属図書館所蔵

では、明治8年(1875年)に198戸965人が移り住んだ琴似をはじめ、明治37年(1904年)に制度が廃止されて約30年の歴史に幕を閉じるまでの間、山鼻、新琴似、篠路に屯田兵村が開かれ、後に札幌市域の一部となる各地の開拓に貢献しました。

■今も親しまれる地産建材

明治初期に発見された札幌軟石は、約4万年前の支笏カルデラの火山活動で生まれた溶結凝灰岩です。明治8年(1875年)に本格的な採掘がはじまると、加工しやすく、保温性や耐火性に優れる特徴から、防火用途や農業用倉庫などに利用され、木造開拓使本庁舎の焼失を契機に石造建築が奨励されたこともあり、最盛期には年産30万個(ブロック)、100軒以上の石材店が営業していたほどでした。札幌



札幌軟石採掘現場
札幌市公文書館所蔵

札幌軟石を用いた歴史的建造物では旧札幌控訴院(札幌市資料館)が有名ですが、リンゴやタマネギなどの農業用倉庫として盛んに用いられ、役目を終えた今でも、街並みに溶け込み、地域に親しまれながら残るものも少なくありません。

軟石の持つ独特の優しい雰囲気には今も愛好者が多く、最近でも南区石山の軟石採掘場跡の景観をイベントやまちづくりに生かす活動が見られるほか、古い軟石造の建物をリノベーション⁶³したカフェ、加工品の雑貨などが人気を呼んでおり、平成30年(2018年)には、北海道遺産に選定されて注目を集めました。

また、軟石と並び、歴史ある札幌の地産建材として、旧北海道庁本庁舎(赤れんが庁舎)やサッポロビール工場にも使用された「れんが」があります。特に、かつての白石村は、優良なれんがづくりに適した土があり、明治17年(1884年)には鈴木佐兵衛が鈴木煉瓦製造場を開いて約30年にわたり、白石産のれんがを供給し続けました。このれんがは、現在重要文化財となっている旧手宮鉄道施設 機関車庫3号(小樽市総合博物館にて一般公開)や東京駅にも使用されたといわれ、日本の近代建築に足跡を残しました。

⁶³ リノベーション：建物を改修して新たな機能や価値を加えること。

■「馬鉄」に始まった路面電車

「市電」のルーツは、南区石山で切り出した石材を運ぶための馬車鉄道で、明治42年（1909年）には乗客の運搬を開始し、明治45年（1912年）には「札幌市街馬車鉄道株式会社」と名を改めて札幌各地域に路線を拡大しました。

大正7年（1918年）に「札幌電気軌道株式会社」による路面電車が開業し、昭和2年（1927年）には市営化され、最盛期には新琴似駅前方面や円山公園、豊平駅（現豊平4条8丁目周辺）前、苗穂駅前方面にも路線が延伸されました。現在も都心を囲む環状1路線が営業しており、昭和中期生まれの旧型車両とLRT⁶⁴が共存する姿や、竹のササラを利用した除雪車両「ササラ電車」が走る様子などは、都心の特色ある風景として市民や観光客にも親しまれています。



ササラ電車

■ななめ通りから見る札幌村の歴史

東区の「ななめ通り」の正式名称は「北海道道273号花畔札幌線」で、かつては沿道にあった札幌元村にちなんで元村街道と呼ばれていました。

中心市街地近くの基盤の目状に交差する街路の規則性と無関係に北東へ斜めに伸びる道筋は、開拓使による本府建設以前のまちづくりの痕跡（大友掘の流路）を示すものです。

沿道には、本龍寺のように江戸時代に起源を持つ寺院があるほか、大友亀太郎役宅跡（札幌市指定史跡）や大正9年（1920年）建立の大覚寺山門、再利用された古い軟石造りの倉庫などもみられ、札幌村と呼ばれた時代から営みをつないできた周辺地域の歴史文化を感じることができます。



ななめ通り
札幌市公文書館所蔵

⁶⁴ LRT：Light Rail Transit の略。低床式車両の活用や軌道・電停の改良による乗降の容易性、快適性などの面で優れた特徴を有する次世代の軌道系交通システム。

■手稲山麓に残る鉱山村の記憶

札幌西部の手稲山は、手稲区民をはじめ、市民にとって親しみのある山ですが、明治期にはここで金の鉱脈が発見され、昭和の初めにかけて「東洋第二の鉱山」とまでいわれるほど活況を呈した時代がありました。鉱山街の児童を受け入れるために開校した歴史を持つ、現在の手稲西小学校（旧札幌郡手稲村立軽川尋常高等小学校手稲鉱山特別教授場）の「鉱山の部屋」と



鉱山内のジオラマ
撮影場所：手稲西小学校（鉱山の部屋）

名づけられた資料室には、手稲鉱山の様子を今に伝える資料が多数保存・展示されており、中でも、当時の子ども達が描いたクレパス画は、最盛期には手稲村の人口の約4分の1が集まった、当時のまちの記憶をとどめる貴重な資料です。

■水の恵みに支えられた西区の稲作文化

西区西野・福井・平和などの地域は、札幌西部の山地に近く、琴似発寒川の扇状地の上流側にあたります。明治中期までには河川からの引水によって水稻耕作を成功させ、当時、西野地区には百台もの「もみすり水車⁶⁵」が並んだといわれています。かつて採石場だった五天山公園には、復元された水車小屋のほか、ホタルやサンショウウオなどの生育環境も保全（復元）され、豊かな水の恵みに支えられていた地域の歴史文化を今に伝えています。



五天山公園
出典：五天山公園 HP

⁶⁵ もみすり水車：籾から籾殻を取り除いて玄米にする水車。水車と連動して杵が動く仕組み。

■日本酪農の父が残した足跡

白石区の上白石（現在の菊水）地区は、明治35年（1902年）から昭和2年（1927年）まで、日本酪農の父と言われる宇都宮仙太郎が開いた宇都宮牧場があったことで知られます。仙太郎は、2度のアメリカ留学などで最先端の欧米の酪農技術を学び、明治24年（1891年）には札幌市内で牛乳の製造販売と、民間初のバター製造に取組みました。また、明治40年（1907年）12月には、ホルスタイン種牛を輸入して品種改良するなど、情熱をもって日本近代酪農の発展を牽引しました。



宇都宮牧場(上白石村)
出典:札幌市開始50年記念写真帖

大正13年（1924年）には娘婿の出納陽一と共に、厚別区上野幌に宇納牧場を開いたほか、大正14年（1925年）には、仙太郎に師事し、後に北海道酪農義塾（酪農学園大学の前身）を開いた黒澤西蔵らとともに、有限責任北海道製酪販売組合（雪印メグミルク株式会社の前身）を設置するなど、酪農の発展を牽引し、札幌に多くの足跡を残しました。

■歩兵第25連隊のまち月寒

明治29年（1896年）、月寒に、屯田兵を母体とした陸軍第七師団⁶⁶独立歩兵大隊が入営し、明治32年（1899年）には陸軍第七師団歩兵第25連隊と改称されました。明治42年（1909年）には札幌初の水道となる連隊のための月寒上水道が完成し、西岡水源池がその貯水池として使われました。

歩兵第25連隊の足跡を今に伝えるものに、さっぽろ・ふるさと文化百選にも選定されている「アンパン道路」があります。明治43年（1910年）、旧豊平町役場が豊平から月寒に移転し、不便を強いられることとなった平岸の人々の要望で開かれた新道で、連隊はこれに訓練名目で無償協力し、地元住民とともに僅か4か月余りで全長2.6kmの道路を完成させたというものです。町が兵士達の間食としてアンパンを提供したため、この名で呼ばれることとなりました。



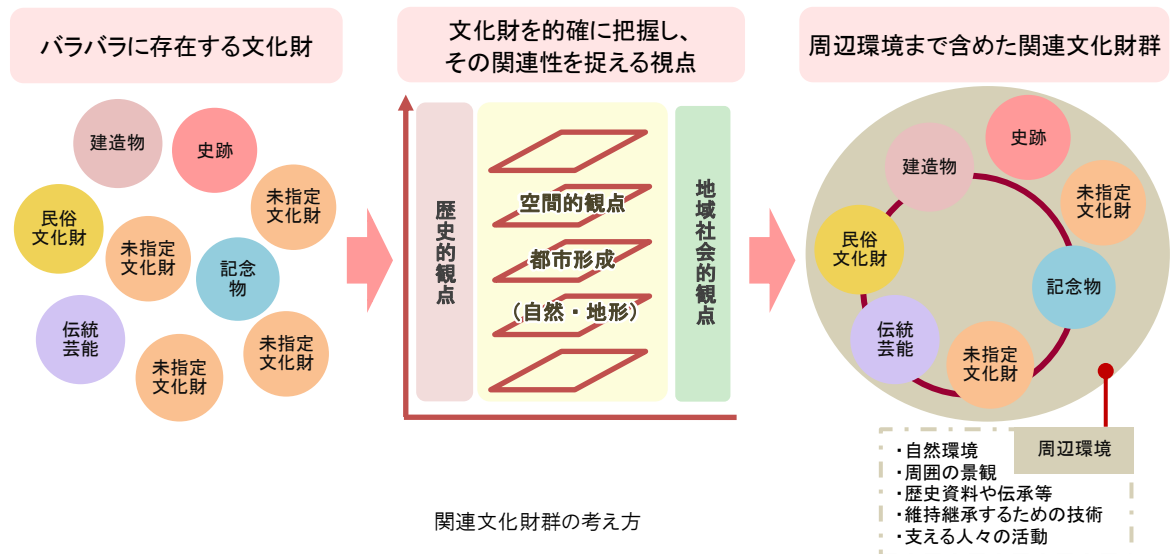
歩兵第二十五連隊
出典:札幌市写真帖

⁶⁶ 陸軍第七師団：大日本帝国陸軍の師団の一つ。昭和29年（1896年）に月寒村に設置され、昭和33年（1900年）～昭和34年（1901年）にかけて、師団本拠を旭川へ移転した。

2 関連文化財群の考え方

(1) 関連文化財群とは

文化財は、人々の暮らしの中で他の要素と密接な関係を持つことでその価値が形成され、受け継がれてきているものです。関連文化財群とは、文化財とその価値を形成する様々な要素（周辺環境）とを一体のものとして捉えたものであり、文化財の本来の価値や魅力を損なわず、様々な形で生かしながら将来に引き継ぐための枠組です。



(2) 札幌市の関連文化財群の考え方

札幌市では、かけがえのない歴史文化の価値を市民とともに発見し、それらを札幌の魅力資源として総合的に保存・活用するための枠組として、関連文化財群の考え方を用います。

札幌市では、概ね以下の要件を備えた「文化財や周辺環境のまとまり」を、広く市民の声を取り入れて様々な切り口で選び出し、札幌らしさを表す関連文化財群を順次、設定していくこととします。

■札幌市の関連文化財群を設定する際の要件

- ・札幌の歴史文化の特徴をよく表す文化財群を一つのまとまりとして捉えることで、核となる文化財以外の様々な要素（関連する文化財や周辺環境）が見いだされ、結果的に、札幌の個性や魅力がより際立つようになるもの
- ・大人から子どもまでが楽しめる物語（ストーリー）によって説明され、これにより、札幌の歴史文化についての魅力のPRや、理解の促進に貢献するもの
- ・市民が愛着や誇りを感じ、自ら守り伝えていきたいと感じるとともに、その魅力を誰かに伝えたいと感じるもの

札幌市では、関連文化財群の設定を、市民が自ら暮らす地域の魅力を共有し、来訪者や次世代の市民へ伝えていくための新たな取組として、市民の参加と発意で充実させていくのが望ましいと考えています。今後、市民参加の下で設定される関連文化財群について、その構成要素をつなげるストーリーを展開し、札幌の歴史文化の価値や魅力を分かりやすく発信することで、観光や地域づくりの資源として、文化財の効果的な保存・活用を実現するとともに、文化財（群）の保存・活用に多くの市民が共感し、これらの市民活動が活性化することを目指します。

【関連文化財群設定後の活用例】

- ・ 構成要素となる文化財を周遊するまち歩きツアーの商品化
- ・ 「〇〇のまち」等の文化財のストーリーによる地域の魅力発信
- ・ ストーリーで歴史文化を深掘りする生涯学習講座の開催

